

芸術祭が始まる

東京藝術大学美術学部絵画科准教授
アーツ前橋チーフキュレーター

みやもと 宮本
たけのり 武典

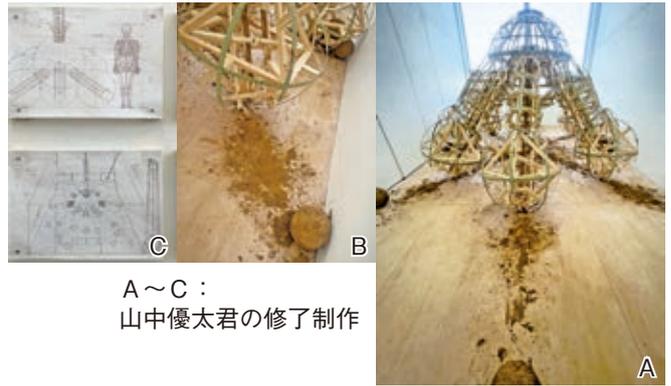
① 桐生での学びをいかして

私が教える東京藝術大学では、4年生の最後に卒業論ではなく卒業制（卒業制作）の提出を求めます。絵画・彫刻・デザイン・建築・映像などさまざまな領域で研さんを積んだ才気あふれる若者たちが、藝大の上野キャンパスと東京都美術館を使って各々の卒業制作を一同に展示する「卒業制作展」が、今年も2月1日目で開催されました。

この「卒業展」、藝大生を主人公にした青春漫画『ブルーピリオド』のヒットもあってか、コロナ禍以降は入場者数が増加し、土日は入場制限をかけるほどにぎわう展示会になりました。今期の出展者は私が藝大に着任した年に入学したメンバーなので、卒制を見れば明らかかなその成長ぶりが誇らしかったです。

その中には桐生での滞在制作に参加した学生たちもいました。以前このコラムで紹介した修士2年の山中優太君は、桐生では廃屋の土壁を剥がして大きな泥団子を作っていました。卒業展ではその球体がいくつも枝分かれし、彼自身の身体・骨格のように変化していました。

同じくコラムで取り上げた中村光佑君は、アースケア桐

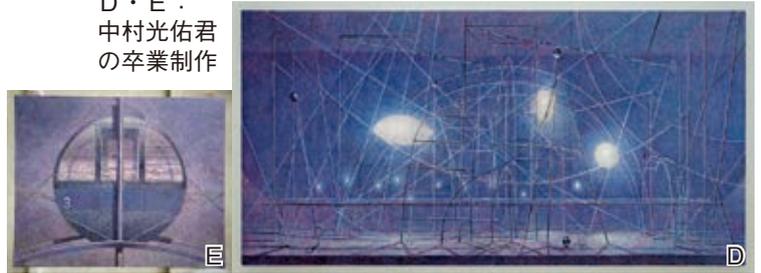


A～C：山中優太君の修了制作

生が岡遊園地の観覧車のゴンドラをモチーフに、街に流れる不可逆な時間の流れを絵画化していました。卒制では夜の公園を「ニュートンのゆりかご」のような振り子が駆け巡る不思議な光景を大画面に緻密に描いて観客を驚かせていました。

山中君も中村君も、桐生では廃工場や倉庫跡といった、土地の記憶を宿した場所を意識した制作・展示を試みたのですが、卒業の会場は「美術」のためにしつらえられた白い空間（美術館とアトリエ）です。この場所の違いをどう考えるか。二人とも美術館や

D・E：中村光佑君の卒業制作



芸術大学という権威の外にある桐生のプログラムに参加したからこそ、それぞれの美術に対する姿勢と解釈がより明確になったと私は考えます。

彼らの作品は、私たちが桐生で取り組んでいるアーティストのための環境整備が、中央のアートヒストリーにおいても有用であることの証です。今年11月に開催する芸術祭「桐生AIR (Artist Residence)」では、二人にもこれらの作品を再出展してもらおうつもりです。教育は成果が出るまで時間がかかる。美術は特に、なのです。

パチリいい顔 桐生っ子

市内に居住する3歳まで（申し込み時）の桐生っ子を募集します。

詳しくは、市ホームページをご確認ください。
問い合わせ = 魅力発信課 (☎46-1049)



ふじもと じゅらん 藤本 准颯ちゃん
3歳5か月
(菱町一丁目)



きりゅう せ お 桐生 晟壮ちゃん
9か月
(錦町三丁目)



みやかわ すい 宮川 粹ちゃん
4歳
(広沢町三丁目)



うえきりつき 植木 理月ちゃん
2歳8か月
(境野町三丁目)

広告